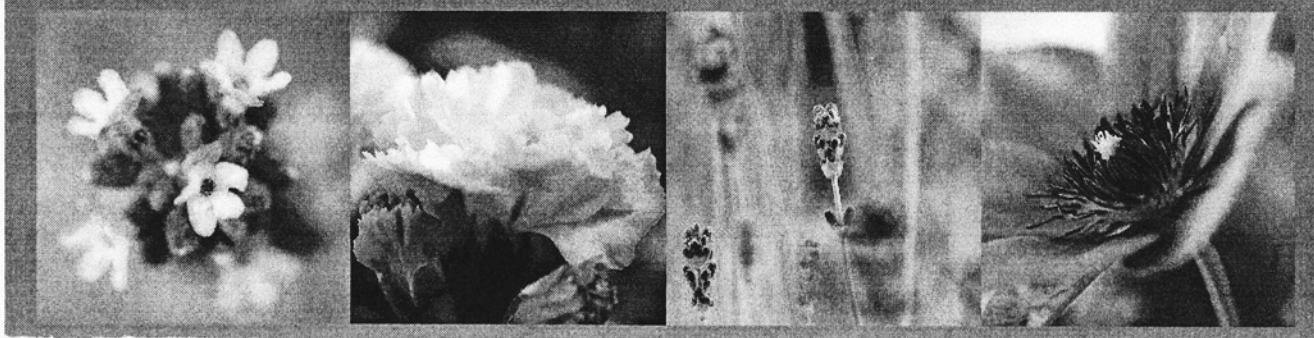


We 25R

No.222 03/06/18



ネコと宗教学 実習生のいい加減な話

「宗教学」とはどんな学問か？これほど答えにくい質問はない。というのも宗教に関係のない現象など全くと言っていいほど存在せず、従ってそれを対象とする学問も必然的に雑多になる。しかしどんなに下らない事柄にもコメントを付けることができるということは、かえって大きな魅力となる。例えば、「イヌ派」と「ネコ派」。

統計的には、一般にイヌ派が6割、ネコ派が4割と言われているが、実は私が所属する宗教学研究室ではネコ派が7割と圧倒的に多い（かく言う私も紛うことなき生粋のネコ派である）。それはなぜだろうか？何となく宗教に興味があるヤツはネコの方が好きそうな感じはするが…。実はこれ、宗教学によって理論的に説明できるのである。

*

近代社会学の創始者として高名なマックス・ウェーバー(1864-1920)は、当時流行していた宗教研究(フレイザー、デュルケムなど)にも興味を示し、今もなお影響力を持つ重要な著作をいくつも書き上げた。今巷に溢れている「よくわかる宗教」の類の書籍は、ほとんど彼の理論的枠組に沿っている。彼の優れた点は「宗教とは何か」という本質論を立てるのではなく(こういう試みは大体失敗する。主観が入るから)、「理念型」、つまりモデルを想定しそれにどれだけ近いかにによって宗教的現象を分類する、という手法にあった。その中に「神強制」と「神礼拝」という概念がある。

*

「神強制」は呪術とも呼ばれ、初詣や雨乞いの

ように神に命令して願い事を叶えてもらうことを指す(人→神)。一方、「神礼拝」はただひたすら神のために祈り、神が恩恵を下すのを待つことであり(人←神)、ウェーバーによればこれが宗教である。ここまでくればもうお分かりだろう。つまり神強制がイヌ派であり、神礼拝がネコ派なのだ。我々はイヌをしつけ、餌付けし、言うことを聞かせる。イヌが言うことを聞いたとき、我々は喜ぶわけだ。それに対してネコは媚びない、従わない、餌付けされない、つまり我々の意思から離れている。そうしてネコは気まぐれによって我々にアプローチし、その時我々は無上の喜びを感じる(恩恵が下される)。つまり我々とイヌ・ネコの間にはそれぞれ「人→イヌ」「人←ネコ」という構図が成り立ち、そのために我々はネコに強い宗教性を感じるのであり、「宗教好き」は「ネコ好き」となるのである。まさに「ネコはイヌにあらず」というわけだ(有徳にして最も慈悲深い長老猫オールドデュトロノミーの偉大な言葉。もちろん「ナイフで切っ飛ばそう静寂」な夜の話)。

*

思い返してみれば、ネコは古代エジプトから女神の変身した姿として崇敬され、中世ヨーロッパでは魔女の象徴として畏れられ、とにかく聖なるもの、あるいは神そのものとして神聖視されてきたという確固とした歴史がある。それに比べてイヌはケルベロスにしても狒犬にしても、門番なりお使いなりというひどい扱い。まあ、イヌには独立自尊の精神がないからしょうがないですね。